

アクリル板越しの風景

人間心理学科 伊 東 俊 彦

哲学や倫理学を研究している研究者にとって、コロナ禍が研究活動そのものに影響を与えたかと言われると、あまり影響はないかもしれないというのが正直なところだ。私の専門は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（1859-1941）を中心としたフランス社会思想史だが、こうした思想史の研究は基本的には文献研究で行われる。だから、極端なことを言えば、本を読む場所さえあれば、いかに自宅に引きこもってもいようとも研究はできてしまうのだ。加えて、現在は、多くの資料をネットで参照することが可能になった。フランス国立図書館はGallicaと呼ばれる電子図書館を運営しており、私が読む資料の多くがパブリックドメインになっており、ネット上で参照することができる。1台のPCを前に資料を読んでいれば、とりあえずは研究を進めることができるのだ。もちろん、一人での作業には限界や偏りがあり、研究会などの場で様々な意見を交換することが研究の質を高めるためには必要なのは言うまでもない。でも、大勢からみれば、コロナ禍が哲学や倫理学の研究活動に大きな変化を迫ったという訳ではないのが実情だ。

とはいえ、コロナ禍で急速に進んだオンライン化が、研究環境にプラスの影響を与えた場面はもちろん無いわけではない。先ほど、研究の質を高めるには様々な意見交換の場があった方がいいと述べたが、こうした場はZOOMなどのオンライン会議システムが一般的になったことで広がった。2年前に本学人間心理学科を退官された浮ヶ谷幸代先生とは、こうしたZOOMを使って2ヶ月に1回ほどずつ研究会を継続している。数名の文化人類学者に加え、医学、看護学、教育学など普段話すことのない様々な専門を持つ方々と関心を共有し議論をする場を持てたことは、この2年間で一番楽しい時間の一つだった。

ただ、やはり制約が無いわけではない。現在の私のもう一つの研究分野は、アール・ブリュットなどと言われる障害を持った方などの芸術表現活動だ。生み出された作品そのものではなく、そうした作品がどういった場で生み出され、そうした活動がアーティストやその周囲の人々を含めいかなる意味を持つかを、生活の場そのものに着目し探求する、そうした研究を続けている。しかし、そうした場がコロナ禍で遠くなった。これまでフィールドワークを続けてきた北海道の精神科の診療所とはZOOMでミーティングに参加させてもらったり、アール・ブリュットに関わる方にZOOMでインタビューをしたりすることはやってきたが、アクリル板越しに遠くを見ているような感を払拭はできない。また再び、こうしたアクリル板が取り払われ、人々が共に集い活動する場そのもののダイナミズムを体感しながら、それを研究する時間が戻ってくることを願っている。